

「各教科等の目標及び内容」の視点を活用した 生活単元学習の授業づくり研修プログラムの効果

－教師の授業づくりに対する意識変容から－

○戸谷 健史

奥村真衣子

（信州大学教育学部附属特別支援学校）（信州大学学術研究院）

KEY WORDS: 特別支援学校学習指導要領各教科等編、知的障害、教員研修

I 問題と目的

改訂された特別支援学校学習指導要領が令和 2 年度より順次実施されている。改訂に伴い、知的障害である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の各教科の目標や内容について充実・改善が図られたことは周知事項となった。

これらの改訂を受け、各教科等を合わせた指導の授業づくりにおいて、「育成を目指す資質・能力」を踏まえながら、どのように各教科等の内容を扱っていけばよいのか、また、どのように学習評価を行っていけばよいのかといった点を追究した実践的研究が各所で行われるようになってきた。

そのなかで、各教科等を合わせた指導の一指導形態である生活単元学習の授業づくりにおいて、戸谷・奥村（2020）は、子どもの願いを基にしながら、「各教科等の目標及び内容」の視点を活用する際の要点を 6 つ挙げている（表 1）。

表 1 「各教科等の目標及び内容」の視点を活用する際の要点

要 点	概 要
① 実 態 把 握	その時期における願い、興味・関心、教科別実態把握シートを用いた全体像の把握
② 学習活動と学習内容の整理	単元に含まれる各教科等の学習内容の明確化
③ 主に育成をねらう各教科等の計画	各教科等の絞り込みと「伸びている力」の明確化
④ 具体的な学習内容（ねらい）の設定	「各教科等の目標及び内容」との対応を図る
⑤ 手立ての策定と実施	学習内容の深まりを促進する手立ての明確化
⑥ 学 習 評 価	根拠のある学習評価（ねらいと子どもの姿を対応）

しかし先の研究では、第一著者が実践計画・実施・評価の中心を担っており、他の教師においても活用可能かは検証できていない。そこで、本研究では戸谷・奥村（2020）の見出した要点を踏まえた研修プログラムを中学部教師に実施し、それぞれが生活単元学習の授業づくりを行った後、教師の授業づくりに対する意識変容を捉えることにより、「各教科等の目標及び内容」の視点を活用することによる利点や課題を導き出すことを目的とする。

II 方法

1. 研修プログラムの実施（要点の共有）

第一著者が「各教科等の目標及び内容」の視点を活用する際の要点や手順をまとめたワークシートを作成し、具体例を示しながら記入方法

表 2 学級ごとに実施した生活単元学習

学 級	単 元 名
1	「うどん対ラーメン」を演じて、みんなで楽しもう
2	「おいでよ、中 B パーク」を作ってみんなと楽しもう
3	手作りカレンダーを制作して、お世話になったみなさんに感謝の気持ちを伝えよう

を説明した。
対象単元：学級ご

とに実施した生活単元学習（X 年 1～X 年 2 月）（表 2）

対象教師：中学部教師 9 名（教師 A～I）

3. 手続き：教師が対象となる生徒を定め、①実態把握、②学習活動と学習内容の整理、③主に育成をねらう各教科等の計画、④具体的な学習内容の設定、⑤手立ての策定と実施、⑥学習評価の手順で授業づくりを実施した。

4. 分析

記録用紙の記述内容を基に、教師の授業づくりに関する

意識の変容を帰納的に分析した。なお、本研究の実施にあたっては、研究概要や個人情報保護について説明を行い、同意を得た上で回答を得た。

III 結果

分析の結果、教師の授業づくりに対する意識変容の共通項として、以下の利点及び課題が挙げられた。（表 3）

表 3：教師の授業づくりに対する意識変容（抜粋）

利 点	○多様な学習活動の展開 生徒の願い、興味・関心を基にしたうえで、学習活動と学習内容の対応を明確にしたことにより、学習活動から生徒が願いをもって取り組むであろう学習内容を具体的に想定することにつながった。結果、これまでよりも教材を様々な視点から捉え、単元中の生徒の学びの様子を確かめながら、多様な学習活動を展開することができた（教師 C、D、E、G）。 ○学びの過程を見据えた教材化 生徒が学習内容にどのように出会い、習得し、活用していこうとするのかを教師が見据えながら教材化することにつながった（教師 A、B、D、E、I）。 ○生徒が働かせている見方・考え方の理解 生徒が学習内容を身につけ、活用していく際には、その生徒の認知面や情動面の特徴を伴うことが見えてきた。結果、生徒がどのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかといった、生徒が働かせている見方・考え方を教師が捉えられるようになってきた（教師 A、F、H）。
	○実態把握、共通認識の仕方 生徒の各教科等の力がどこまで伸びているのか、伸びつつあるのかを様々な面から捉えたり、教師間で共有したりしていきたい（教師 A、D）。 ○教師が各教科等の学習内容の理解を深めること 個別の指導計画における長期目標と各教科等の学習内容とのつながりを捉えることに難しさを感じた。今後は、教師自身が各教科等の学習内容について精通することにより、それらを明確にしていけるのではないかと（教師 A、E、H、F、I）。 ○生徒の願いが根底にある学習内容 生徒の自律的な学びを促進するといった点から、生徒の願いに寄り添いながら各教科等の学習内容を扱っていくといったバランスを大切にしながら授業づくりを続けたい（教師 B、C、G）。
課 題	

IV 考察

本研究を通して、生活単元学習の授業づくりにおいて、「各教科等の目標及び内容」の視点を活用することにより、①教師が子どもの実態や学びの過程、内面の変化などをより豊かに捉えていけるようになる、②学びの可能性を豊かに含んだ、多様性のある教材化や学習活動を展開していくことにつながるといった利点が明らかになった。このことから、戸谷・奥村（2020）の見出した要点は他の教師にも活用可能であり、汎用性があると言える。

さらに今後は、実践を重ねるなかで、①教師自身が知的障害の各教科等の学習内容について精通していくこと、②教師が、子どもの願いに寄り添いながら、適時性を判断し、各教科等の学習内容を扱っていくといった視点で授業改善を進めていく必要性が示唆された。

V 引用文献

文部科学省（2018）特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編
戸谷健史・奥村真衣子（2020）「各教科等の目標及び内容」の視点を活用した生活単元学習の授業づくり 信州大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻（教職大学院）実践研究報告書抄録集, P53-56

（TOYA Kenji, OKUMURA Maiko）